

に際しては、政府軍の東征に従う者もあった。それ故に大山における排仏は、徹底して実行されたのである。供僧と神主および御師と、その地位は逆転した。

さらに一八七三(明治六)年七月三十日、大山では権田直助を阿夫利神社の社司に迎えた。権田は武蔵国入間郡(埼玉県)の医家に生まれ、江戸に出て医師をまなんだが、二十九歳のとき平田篤胤の門に入り、それより平田神道を奉じて、尊王のために奔走する。また篤胤の志をついで国語の研究にもつとめ、大山に迎えられるには六十五歳であった。

権田社司のもと、大山では排仏を完了し、東海から関東・奥羽にまたがる信者を糾合して、敬慎教会が組織された。一八七六(明治九)年十二月には神道大山分局が設けられ、生徒寮に学生を集めて、権田は神道や国語を教える。こうして敬神の思想を涵養し、大山学派の名声は天下にとどろくに至った。まさしく大山は、真言の霊場から、神道の道場へと変容したのであった。権田は一八八七(明治二十)年に没し、その墓は大山の麓に建てられている。

江島神社

かつて大山詣にくりだした人びとの多くは、帰りみちに江の島へ寄った。金沢から鎌倉をめぐり、さらに江の島へまわる遊客も少なくなかった。風光は絵のように美しく、その姿は水のなかに浮かぶ緑の亀にたとえられた。そこに鎮座するのが弁才天であり、江の島は観光の名所であるとともに、弁才の霊場として知られたのであった。

江の島では弁才天を神として祀った。すなわち江島明神である。やはり本宮・上宮・下宮に分かれ、それぞれ社殿が営まれた。しかし、ここでも神仏習合の形態がとられ、金亀山よここ願寺と称した。江戸時代になってからは、岩本院(本宮)・上之坊・下之坊の三院が真言宗に属し、仁和寺の末寺として全山を支配した。

こうして江の島には、三宮のほか、七堂伽藍が立ち並び、竜宮を思わせるような壮観となった。全島が仏教の色彩で塗りつぶされ、神社でありながら、供僧たちが上に立って、御師の御札くばりから、旅籠の営業まで、一切を取りしきった。

明治の世に及んで神仏の分離令が発せられると、岩本院はさっそく還俗を願い出る。島内の堂塔をはじめ、仏像や仏具の類は、つぎつぎに破壊された。祭礼の形態も、仏式から神式に改めた。僧侶たちは、自己の保身をはかり、かつ伝統の權威をまもるために、たちまちにして旧来の信仰をすて、あえて神職への転換をめざしたのであった。

金亀山の山号も捨てられた。いまや江の島は弁才天のやしろではない。その名も江島神社となり、三宮はそれぞれ奥津宮・中津宮・辺津宮と呼ばれて、祭神も古典にあらわれる三女神があてられた。また岩屋には天照大神ほかの諸神を祠った。かつての祭神であった弁才天の像は、宝物陳列所に安置されるに至る。

こうして江の島も変容した。江の島から表むきは弁才天の信仰は消えた。しかし金亀山から江島神社にかわっても、参詣におもむく人びとは、依然として弁才天のやしろと信じこんでいる。三宮に祀られている神代の三女神の名を知る者は、果たしてどれほど存在するであろうか。神仏分離は強行されたものの、長い歴史のなかでつちかわれた民衆の信仰まで改めることは、できなかつた。

二 神社の創建と社格

鎌倉宮の創建

明治の新政府は神仏分離の政策を推進して、神社から仏教色を排除し、あわせて仏に対する神の優位、ないしは僧侶に対する神官の地位の優位を確立することをめざした。こうして江戸時代には一般に「寺社」と呼ばれていたものが、明治以後は「社寺」と呼ばれるようになってゆく。

同時に政府は、神道を国教化する政策をおし進めた。すなわち国家の祭祀として国家神道を確立し、神道は宗教を超えた祭

祀として位置づける。そうした国家神道の中核をなすのが、伊勢の皇大神宮を頂点とする神社であった。全国の神社は政府の方針にしたがって再編成され、あらたに社格が定められるとともに、国家神道の教義にふさわしい神社が、つぎつぎに創建されていった。歴史の天皇や皇族を祀る神社、天皇に対する「忠臣」を祀る神社、また靖国神社のように天皇のために戦って倒れた将兵を祀る神社が創建されたのである。

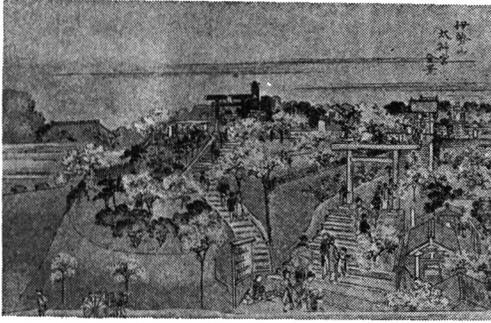
鎌倉の二階堂に創建された鎌倉宮は、後醍醐天皇の皇子として建武中興のために働き、のち足利氏のために殺害された護良親王を祀る。護良親王は皇族として非命に斃れ、しかも南北朝時代の「忠臣」であった。鎌倉宮の建立は明治二年（一八六九）二月、天皇の仰せによる形で決定されたが、皇族を祀る神社としては最も早い。

社殿の造営が成ると、明治三年（一八七〇）七月二十日、神体は宮中を出発、その日は鶴岡八幡宮の社家を仮神殿として一泊し、翌二十一日に鎮座した。神社と称さず、鎌倉宮として宮号を称したのは、皇族を祀る故に、神社よりも高い社格を与えられたものである。また二階堂の地は、親王が幽閉され、殺害された地と伝えられ、本殿の裏手に当時の土牢と称するものがある。ただし親王が入られたのは、土の塗籠牢であった。

こえて一八七三（明治〇）年四月、天皇は鎌倉に行幸、鎌倉宮に親拝された。天皇みずから伊勢の皇大神宮に親拝されたのは、明治二年（一八六九）三月の例が最初のことであり、皇族とはいえ、個人を祀る神社に天皇が親拝するというようなことは、かつては考えられなかった。いまや神社の祭神は、現人神あにひとがみとされた天皇が礼拝する対象となったのである。

伊勢山皇大神宮

明治の世になって、国民ひとしく最も尊崇すべき神社とされたのが、伊勢の皇大神宮であった。伊勢の両神宮に対して、天皇が親拝する例を開いたのをはじめ、明治二年（一八六九）九月には両神宮の正遷宮を行ない、公式機関において遙拝式を挙行した。



伊勢山皇大神宮全景 (1902年)

『横浜名所図会』から

こうした中央の動きに応じて、神奈川県においても、伊勢神宮についての積極策を展開する。横浜の戸部町に「伊勢山ト唱へ、天祖ノ神廟ヲ奉齋」するところがあった。古老の伝えによれば、むかし国郡に詔して創建したものであるという。いまは小さい祠殿が残っているのみであるが、ここに「高敞ノ地ヲ撰ヒ、旧祠ヲ其儘移シ」、大いに造営して「管内の宗社」にしよう、という計画が立てられた。大神宮の再建につき、神奈川県から政府に伺いを立てたのは、明治三年正月のことである。新しい社地が選定されると、同年十一月には重ねて伺いが立てられ、再建の意義について「万民ヲシテ祭政一致ノ実ヲ瞻仰シ其方向ヲ定メシムルハ不^{もつと}及^{おおよ}申^ず、皇国ノ神威、海外異域ニ光被スルモ亦此一挙ニ有^{これあり}之^ぞ候^{じたまつ}ト奉^ぞ存^{じたまつ}候^と」と打ち上げた。

新しい社地は、かつて野毛山と呼ばれたが、いまや伊勢山と名づけられ、明治三年（一八七〇）十一月から「県内上下ノ協心戮力ヲ以テ輪煥ノ美ヲ致」すため、造営が始められた。すなわち民衆の負担において建築が進められたのである。

明治四年（一八七一）四月、造営は完成した。よって四月十五日、正遷宮の儀を盛大に挙行する。かつて伊勢山の神事を掌ったのは、近隣にあった延命寺の僧職であったが、神仏分離の後は神奈川県管理の場所となり、あらたに神官が任命された。当初の神官（龍山親祇）の回顧談は、そのころの状況をよく伝えていて興味ふかい。

……私は丁度その時は十七歳で羽衣町の弁天社の社掌と云ふ役目でありました。その当時は面白いことには真言宗の僧侶が神職に早替りをする者が沢山に出来ました。最も旧来よりの神官も神奈川・川崎など幾人かありましたが、僅かで多くは復職の者でありました。私なども復職と云ふ名義で神官になったのでした。其故、祭神など心得

て居る者は殆ど無いと云ふ有様で伊勢山の御遷宮の時なども其祭式には大分困ったものでした。旧来からの神職は、おのづと復職の者を軽蔑すると云ふ風でありましたから、伊勢山の社掌に誰を命ずるかに就ては、中々県でも相当苦心したさうでした。処がはからずも十七歳の私に其白羽の矢が立ったのでした。私の父は当時元町の名主を勤めて居りましたので、父が御請けをして参りまして、非常に喜んで、大に奮励せよと申して、其祝として黄金作の大小を求めて私に呉れました。……

正遷宮の祭礼にあたっては「遠村は組合惣代両三人、近村は一村毎に惣代のもの見計らひ、何れも参拝」するよう、県から命ぜられた。こうして伊勢山皇大神宮は横浜の総鎮守として、かつ県下における伊勢崇敬の中心として、神道興隆の役割を果たすことになるのである。

社格の決定

明治四年五月には、太政官布告をもって、神社は国家の宗祀と宣せられ、その社格が定められた。すなわち全
 国の神社は、官社と諸社とに分けられ、さらに官社は官幣社と国幣社として、それぞれ大中小の社格が定められたのであった。県下において最も高い社格を与えられたのは鎌倉宮であり、一八七三年六月九日、官幣中社に列せられた。官幣社とは本来、神祇官から奉幣する神社をさす。古代から皇室の崇敬がとくに厚く、由緒の格別に重い神社、歴代の天皇、あるいは皇族を祀る神社が、官幣社に列せられた。鎌倉宮は皇族を祀る創建の神社として、初めて官幣中社に列せられたものであった。

国幣社は元来、国司が奉幣する神社をさしたが、改めて例祭に国庫から奉幣する神社とされ、古くから一国の一の宮あるいは総社として崇敬をあつめてきた神社が、これに列せられた。県下には高座郡一之宮村（現在 寒川町）に寒川神社が鎮座し、相模国一の宮として古くから尊崇されてきた。よって寒川神社は明治四年五月十四日、国幣中社に列せられた。

寒川神社の由緒は、県下で最も古い。平安初期に編修された『延喜式』神名帳にも録せられ、相模国一の宮として高い社格を保ってきたのであった。一宮郷あるいは一之宮村の名称も、これに由来する。

しかし寒川神社の祭神については、むかしから定説がなかった。平安時代の史書（六国史など）には、寒川神あるいは寒河神と記されている。のち寒川大明神とも呼ばれ、江戸時代には祭神を八幡神（八幡大菩薩）とする説が有力となったほか、菊理媛、沢女神、あるいは素戔嗚尊を祀ったとする説もあらわれた。ところが一八七四（明治七）年、政府（教部省）が『特選神名牒』を撰するに当たり、皇大神宮の末社である牟瀨乃神社の祭神が寒川比古、寒川比女である、というところから、寒川神社の祭神も、これと同じであろうと推定した。さらに一八七六（明治九）年『官社祭神考証』において、寒川神社の祭神は寒川比古命、寒川比女命と決定したのである。かつては寒川神社の神事も、僧転が掌ってきた。別当として薬王寺があり、供僧として神照寺など四寺院があった。しかし神仏分離によって、薬王寺や神照寺は復飾として神職となり、他の寺院は神社から離れて独立した。

さて官社に対して諸社と呼ばれる神社は、県（府）社・郷社・村社に分けられた。地方において尊崇される神社が、祭神と由緒の面から社格が定められた。地方の生活に密着しているから各社は氏子を有する。大山の阿夫利神社は一八七三（明治六）年、江島神社も六年、県社に列せられている。伊勢山皇大神宮も一八七五（明治八）年に列せられた。鶴岡八幡宮は、はじめ県社に列せられたが、一八八二（明治十五）年、国幣中社に昇格した。元箱根に鎮座する箱根神社も、一八七三（明治六）年七月、県社に列せられている。この神社も箱根山の鎮守として創建は古く、かつては箱根大権現と称して、関東から東海の一円に、ひろく信者を擁していた。そして江戸時代まで、神社を支配していたのは曹洞宗の東福寺であり、その金剛王院の住職が別当をつとめていた。それが明治の神仏分離によって、別当も箱根太郎と改名し、伽藍を廃却して箱根神社となったのである。な

お社格は一九二八（昭和三年）十一月に至り、国幣小社に昇格した。

三 丸山教の開教

丸山教の基盤

江戸時代の末期には神道のなかに、黒住教や天理教、また金光教など、新しい教派がつつぎつつぎに開かれ、していた。いまの神奈川県下にも、これらを信仰する者が多かったことは、いうまでもない。こうした新しい神道各派は、いづれも民衆のなかから起こり、幕府や新政府の権力に頼ることなく、むしろ権力と対決しながら、民衆のなかに信者を開拓していったものであった。そして明治に及んでは、県下に新しく丸山教が開かれるのである。

明治政府は国家神道の確立をめざし、神社を主体とする国家神道を国家の祭祀として、宗教から切り離した。いわば国家神道は、宗教を超越したものとされたのである。そこで民衆の間に普及した神道各派は、宗教としての神道ということになり、教派神道と呼ばれるに至った。教派神道として政府から公認されたものが、布教をゆるされる。公認に至らぬ各派は、もとより弾圧の対象となった。丸山教もまた、開教の当初は激しい弾圧をうけたのである。

丸山教は明治三年（一八七〇）、武蔵国橋樹郡登戸村（現在川崎市多摩区登戸）において、農民の伊藤六郎兵衛によって開かれた。六郎兵衛の生家（清宮家）は、登戸の貧しい農家であった。ここに文政十二年（一八二九）、次男として生まれる。農家であるから、幼少のころに受けた教育も、寺子屋における読み、書き、算盤そろばんにすぎない。しかし当時の通俗者から得た教養が、のちの丸山教における教義の基本となったのであった。登戸は大山詣の街道筋に当たり、小さな宿場町を形成していた。富士

山を信仰の対象とする富士講も、早くから伝わっている。富士講のひとつに、丸山講があった。六郎兵衛の生家の近くには富士塚が勧請され、本家にあたる清宮伝左衛門が丸山講を指導していた。したがって六郎兵衛も、幼少のころから丸山講の影響を強く受けていたわけであった。とくに青少年期、三度にわたる大病を、富士講の祈禱によって克服してからは、熱心な信者となった。さて六郎兵衛は十四歳のとき、隣村の農家に作男せきとして住みこんだ。そこは叔母の嫁ぎさきであったが、十年にわたって懸命に働いた。儉約を重んじ、律義と謹直を旨とする毎日をつらぬいた。そうした生活態度は寺子屋で教えられたものであり、勤労精神を与えたものは富士信仰であった。

六郎兵衛の誠実は認められ、二十四歳のとき、登戸の伊藤家に婿として迎えられる。伊藤家は相当の田地を所有するほか、酒類や新炭の商売も営み、登戸では裕福な家に属していた。ここでもまた入婿として、慎みぶかく家業に励んだ。

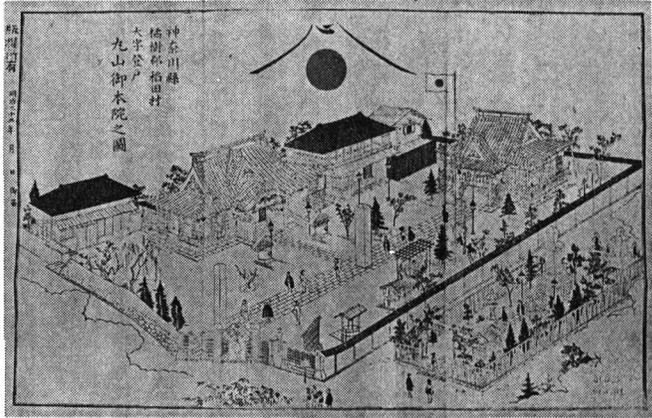
やがて明治の世となった。旧来の権威は否認される。登戸にも新しい時勢の波は押し寄せてきた。そうして六郎兵衛の身にも、思わぬことから生涯の転機がおとずれたのであった。

六郎兵衛の開教

明治元年（一八六八）の十二月、六郎兵衛の妻は重い熱病にかかった。不動行者に祈禱を頼み、幸いにして全快したが、明治三年（一八七〇）の秋、六郎兵衛に神のお告げが下った。不動行者を頼んだことが責められ、この後は六郎兵衛みずから神の声をきくよう、命ぜられたのであった。ときに六郎兵衛は、四十二歳であった。

いまや六郎兵衛は、家業をすてて信心に専念するに至る。つづいて「天地の神と同根同体を悟れ」とのお告げが下り、三七、二十一日の間の断食修行をつとめて悟りを開くと、さらに「地の神一心行者に命ずる」とのお告げがあった。こうして新しい信仰の道が開かれる。

六郎兵衛は、食行、烟行、水行など、はげしい修行を怠りなくつとめた。周囲には多くの信者があつまつた。しかし警察か



丸山御本陣之図 (1890年)

神奈川県立文化資料館蔵

らは、淫祠邪教と見なされ、しばしば干渉をうけた。家族や親戚からは、信仰をすてるように強要された。入婿ゆえに、いっそう悩まねばならなかった。ついに明治六年と七年には、二回にわたって警察に拘引される。信者たちも弾圧された。釈放された六郎兵衛は七年秋、死を決して雪の富士に登った。断食して入定しようという覚悟であった。

そのころ富士講の糾合運動を起こしていた宍野半なかばという者があつた。宍野は平田派の国学を修め、いったん明治政府(教部省)に出仕したが、明治六年に辞官し、浅間神社の宮司となつて、富士一山講社を結成した。宍野の結社は政府から公認されている。この宍野が、六郎兵衛の活動に着目したのであつた。よつて六郎兵衛に下山をうながし、富士吉田の浅間神社で会見した。

こうして明治八年の春、六郎兵衛は富士一山講社に加入することとなつた。その布教も、この後は公然と認められる。信者も急速にふえてゆき、教勢は関東一円から中部地方にまでひろがった。明治十三年には信者が十万に達した祝祭を多摩の川原で挙行し、一八八二(明治十五)年には登戸に本殿を建てた。

富士一山講社は六郎兵衛の活動に支えられて発展し、明治十五年には扶桑教と称した。しかし十七年に宍野が死去すると、扶桑教のなかで対立が表面化し、ついに六郎兵衛は扶桑教から脱退する。十八年七月、六郎兵衛は独立の教団を立て、その本部を神道丸山教会本院と称した。この後も六郎兵衛は、布教をつづけるかたわら、修行も怠らず、かずかずの奇跡もおこなつ

た。六郎兵衛は教祖であるとともに、信徒にとっては生き神様であった。そのことばは、すなわち丸山教の教義にほかならなかった。そうした教義を、六郎兵衛は晩年に至って、みずから記述し、あるいは口述している。一八八八（明治二十一年）旧曆六月から書き始めたものが「おしらべ」であった。それは六郎兵衛が二十七年三月、六十五歳で死去する直前まで、折りにふれて書きつがれた。この「おしらべ」は全体で三十五万字に及び、いまは丸山教本庁に『教祖親蹟御法』全八巻として蔵せられている。これにさきだつて一八八七（明治二十年）旧曆一月からは、教義の大要ともいべきものが記述されていた。それは『親蹟御法壹之前附』と呼ばれ、「おしらべ」の前文として重んぜられている。

こうした「前附」「おしらべ」は、半紙に筆で記してあり、あて字や誤字が多く、かつ特殊の文字を創案して用いた。したがって判読は、すこぶる困難である。『神奈川県史資料編14近代・現代(4)』には、この『前附』全文と「おしらべ」最後尾の部分を取録し、また『日本思想大系67民衆宗教の思想』（岩波書店）には「おしらべ」の主要部分（全体の七分の二）を取録している。

「おしらべ」の思想

丸山教は富士信仰より発し、したがって丸山教においては富士山を神格化して、最も尊んだ。「おしらべ」のなかにも、次のように述べている。（一）内は筆者。

抑（そもそも）ふじはせかへ（世界）一の山。又八日の元。このところをよ（主）に高砂ともうますこと。この山のぬしハ天竜、地竜、毎竜とゆうてせかへのぬし（主）とゆう。すべてくうき（空気）をつかさどるやくめのもの。くうきハ火水と風あめやゆきこうり。かようなもの、せかへにまきちらすもみな竜王のなすわざ。かようななん（難）をのがれるも、又ハはやりやまへをのがれるも、みなつゝめたるところの天明、海天にて、たすかります。

かつて富士講では、富士の神を仙元大菩薩と称したが、この伝統をうけついで丸山教では「月日仙元大菩薩」と称する一方、あらたに「参明藤開山」と称した。すなわち「丸山の元そハ天地海。抑こゝが参明藤のはじめともうす」というわけであ

った。しかも「参明藤開山」は太陽神のことであり、太陽神の象徴として、日の丸が礼拝された。

また富士講では「南無阿弥陀仏」の念仏を唱えたが、これに六郎兵衛は独特の解釈を加えて「南無あ身田宇す」とし、さらに「奎^ク念あ身田宇す」と書きかえた。農民のなかから起こった丸山教は、唱え言葉にも農耕を主とする意味をふくませたのであった。そして一八八五(明治十八)年からは「天明海天」が丸山教の神言となる。天明とは太陽神のことであり、海天とは太陽神の光うけて輝く海面、さらには世界ぜんたいと、そこに生きる人間を意味する。すなわち「天明海天」ならば、天も地も海も明るく、そこには神の心がひかえており、神の心にすがれば、邪念をいだいた人間も、本然の明るい心に立ち帰ることができる、というのであった。しかし世は明治となり、維新の改革によって、本来の神の心はそこなわれ、「世上はくらやみ……：：：耶蘇だ、きりしたんのとゆう声ばかり」となった。世はおしなべて文明開化の風潮がみなぎる。そうした邪悪な世相に対して、六郎兵衛は「文明をなげう(ち)て天明にみちびく」ことをめざしたのであった。天明海天は、まさしく文明開化に反語する語であった。丸山教においては、農民こそ国の基本である。農民による「五穀成就」こそ、この世における至高の価値であった。天皇も、丸山教では「天農」と書かれ、「てんのものづくり」と読まれる。天は農民の味方である。天下も「下をかへして上とあたためれ(ば)泰平となる」のであった。こうした考えかたから、世直しの思想が生まれた。明治十年代の後半、自由民権運動がさかんになると、丸山教もまた、世直しの思想に支えられて発展する。神奈川県から関東、中部にわたって、信徒の数は百数十万人に達した、といわれる。各地において、信徒による騒動も起こされた。文明開化を諸悪の根源と見なした丸山教が、時勢の進運に取り残された民衆に、ひろく受け入れられたのであった。しかし丸山教も、国家権力による弾圧のため、さらに教義上の問題もあって、明治二十年代の後半からは教勢も衰えてゆく。教義そのものも、この後は勤勉や儉約を強調することにより、支配体制に妥協し、同化していったのであった。